

小天地

鎌倉にて 汀

鷗

月

滑川に沿ふて砂道をその川口に出づ、材木座小壺あたりの丘の、
薄墨色に輪廓淡く、海ぎは白く水蒸氣たちて、うちよする浪のれ
も幽かに、みちて圓き月は中空にかゝり、湖水にも似て鏡の如く
静かなる水面を照らす、をりく、小さき音さしてその影を亂す
は、細鱗のおどるにやあらん。月に背きて稻村ヶ崎の方に向へ
ば、天地夢の如き中を、白き衣きぬつけたる人影の、三々五々さま
よへるを見る。(八月一日)

曉

はだ寒きに不圖目さめぬ、欄間の紙障子かみほの白ければ、はや曉
に近きなるべし、木梢の露の地に墮つる音をも耳に入るべき静
かさの中を、たが家に飼へるか、鈴蟲のりん／＼と清き聲して
すだくをきく、この世のものにもあらぬ心地のせられて、ゆめ
うつゝのさかひにさまよふこと少時、やがて鶴ヶ岡の森に蝸の
なく音ねはげしく、欄間の紙はいつかうす紅ぬに變りぬ。(八月
三日)

朝

あはき霧は谷々やつ／＼をこめて鎌倉の地も常よりは廣ふなれる心地し
つ。露ふかき小みちをたどりて知れるかたをおとづれぬ。とざ
ぬ門に沿へる低き四ツ目垣には、色あざやかなる大輪の朝顔

美はしう開けり。箒目正しき前裁にはコスモス葉鶏頭あゑじなど秋ま
ち顔に勢よく伸びたり。海のかたにゆかばやと、主人あゑじに送られ
て細徑を歩めば、いま摘みしか、茄子白瓜の冷たき泥にぬれて
古き策のうちにあり、かなたの畑には人の影うごきておりく
木鍔の音のみたかし。(八月七日)

晝

サンフラアのみひとりさかえつ。街道は日に輝きて眩ゆく、道
ゆく人の影まれに、鳶色に暗き農家の背戸には、もろこしの葉
の若緑目を射るばかり鮮やかに、ミン／＼油蟬もさすがに鳴を
静めて、今や炎帝の猛威は其極度の力を萬象の上へ加へぬ。

(八月五日)

宵

銀杏の下影おぐらき石階を登れば、八幡宮の社前に出づ、地高
ければ夕風ほのかに通ひて涼し。晝は群れ飛ぶ鳩も、いまは埒
にありて夢をや結ぶらん、社殿奥深く神々しきあたり、一穗の
燈火の朧るげにあたりを照せるを見る。(八月九日)

夜

友を停車場に送りて雪の下の宿へ歸る、夜は十一時に近し、涼
氣身にせまりてうら寒く覺ゆるまで心地よし。仰げば大空に横
はれる天の川あかるく、はやくも秋の使ひは其姿を見せぬ、八
幡社内、杉木立くらき中に動くは荷葉か、その葉を白うする月
はいま東の山の端を離れんとすなり。(八月七日)